



追悼

「小倉襄二の志 ―先生にほめられたくて―」

―故 名誉会員小倉襄二先生―

加藤 博史（龍谷大学）

12月7日、小倉襄二先生は、88年と2ヶ月の生命の営みを終えられた。最期まで、愚痴らず周囲に感謝し誇りを保たれた。先生は、酒とパイプと芸術を愛し、明朗で、些末なことに拘泥せず、精力的に仕事をこなしていかれた。ゼミ旅行で一緒に風呂に入り、先生の背中を流させてもらったのは、まだ先生が44歳の時であった。全共闘運動の余韻が残るなか、ゼミ歌の「北帰行」を仲間と歌い、先生を泥酔させた。先生宅でコンパもした。ゼミの恋人と別れ、先生の前でメソつくつと、喝を入れられ、再アタックした。1972年秋、先生ご夫妻の媒酌で夫婦になることができた。

先生は、京都稲荷の下町で育ち、貧しくても助け合い哀歓を尽くして生きる名もない人たちが好きで、山本周五郎や藤沢周平を愛読されていた。内心潜む悪や性の持つ深淵にも洞察を怠らなかつた。実存を生きる‘人間’と、多様な人生物語が交錯する‘生活’に思考の基軸を置き、「人を人とも思わぬ」権力を一貫して批判した。

先生は常に、全体状況をギョロリとした眼で視、貧困と差別を生み出す構造に迫り続けた。欲望に火をつけ、刺激で充血させる大量消費文化によって、《生活が自立性を喪失していること》に貧困の本質がある、と指摘している(1966年)。そして、社会事業史という研究方法を採られた。

先生は、現場の声を大切にした。街娼、被差別部落、在日コリアン集住地区の調査で大きな足跡を残された。京都ボランティア協会、枚方市オンブズ・パーソン等の創設に尽力され、弱い立場の人のアドボケートに取り組みされた。

軍隊経験、敗戦体験から、先生は、戦争とそれを進める体制を憎んだ。多くの血を流して獲得した「基本的人権」の実現を福祉原理として位置づけた。新島襄の一字をもらい、同志社中学入学から新島学園短大学長を退くまで、先生の人生は同志社と共にあった。「自由教育、自治教会、平民主義、良心充満」の襄先生のスピリッツの土壌から、身体を張って苦難の人たちと共にあろうとした留岡幸助、山室軍平らが輩出した。この一群を、先生は、「底辺に向かう志」と名づけた。襄の子どもたちは、「命、召されたあと、襄先生に‘よくやった’とほめてもらいたい」と願った。

今日、テクニックと対策制度ばやりの福祉界にあって、格差と排除の進む現況を人間と歴史の視点からアセスメントし、基本的人権に則って、共同的信頼関係と生活基盤と個人の尊厳を奪われた人たちに向かい(身交い)、相互にエンパワメントされあうことを目指した小倉先生の志を、少しでも受け継ぎたいと願う。